影踏みライブラリ

朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
影踏みライブラリ

【Ｎコード】
Ｎ０２４６Ｓ

【作者名】
朔

【あらすじ】
小さい頃から、本が大好きだった。
人づきあいが苦手な僕は、
本だけが友達だった。
そんな僕に、気になる人ができました。
日本作家の棚の一番右上の端。
そこは、僕たちだけが知る秘密の交流場所。

第1部

1

まっすぐに吹き抜ける天井。その高さと比例するように堂々と立っている棚には、無数の本が敷き詰められている。ここは、この市内では一番大きな図書館である。入口手前から子供向けの絵本や紙芝居、奥に進むにつれて、作家順に並べられた小説や経済統計、法律の本など、様々なジャンルの本が所せましと並べられおり、その利用者の年齢層は子供から老人までと、とても広い。

世界史、世界地図の本が並べられている棚をまっすぐと抜け、縦並びになっている棚とは違い、横向きになっている百科事典の棚を曲がると、人気の少ない空間がある。それはもちろん百科事典を利用する人はほぼいないためであるが、この場所は初めて来た人からすれば死角でもある場所なのだ。基本的に図書館は本の痛みを防ぐため、直射日光を避けるために窓は天井に近い位置にあるつくりになっている。しかし、ここだけは違った。この場所だけは、大きな四角い縁取りの窓があり、晴れた日にはたくさんの陽の光が差し込んでくる。桐谷悠基、十九歳のこの青年にとって、ここはお気に入りの場所である。

悠基は、幼い頃から本が大好きだった。毎日毎日空いた時間があれば本を読み、時には睡眠時間さえも削って読むほどだった。文字だけの羅列と、逆に文字だけだからこそ生み出せる自分だけの世界観に入り込み、先の見えない展開に身を任せるのがたまらなく好きなのである。その領域はもはや趣味は読書、と言い切れるようなものではなく、まさに活字中毒そのものであった。本がないと落ち着かない、いつもなにか文字を追い続けていたい、それが悠基の心情だった。

「悠基くん、これ戻してきてもらえる？」

「…はい」司書からの指示に短く答える。
先ほどまでに返された本のチェックが終わり、それを戻すためにワゴンに乗せる。本の最下部についているシールを頼りに、悠基は本を元の場所に戻すのだ。
悠基は、人とコミュニケーションを取るのが苦手であった。そのため、親友と呼べるような友達も今までに一人もいない。大学に通っているが、大学でも勉強するか、読書をするかどちらかなのである。唯一親と従姉には普通に接する事ができるが、元々おしゃべりな性格ではないためあまり会話が弾む事はない。
本が大好きである悠基の性格を子供の頃から知っている従姉の楓は、ここの司書として働いている。たまたま人手が少なく、少し忙しい時期であったため、本か好きな悠基ならば、と楓は悠基にアルバイトの話を持ちかけた。給料は低いが、好きなだけ本に触れる事ができる、そう上手いこと楓に話をされ、悠基は二つ返事で頷いた。正直、悠基にとってアルバイト代などはどうでもよかった。好きな本を、好きな時に少しだけ読めるというのが彼の最大の幸せでありご褒美だったからである。もちろん、いくら本が好きでも本の整理中に読むような事はしない。だから、悠基はいつもこの場所で、少し人目を盗んでこれから元の場所に戻す本に軽く目を通すのが好きだった。そこでその作品の中身が少しでも気になれば今度は自分で借りてちゃんと読む。悠基なりの楽しみ方だった。

七時の閉館後、館内の掃除を終えた悠基は、まだ受付場所に残っていた楓のもとへたくさんの本を重ねて来た。
「楓さん、これお願いします」
「…ほんっと、よく読むよね。私でもこんなに読まないわよ」
机の上にどさっと盛大に置かれた本を見て、思わず楓は呆れたように笑顔を漏らす。いつも通りに貸し出し用にカードを出して、バーコードに通してもらう。すべての本に返却期限スタンプを押して

もらった後、男にしては細い腕で借りた本を両手に抱え、帰り仕度をするために楓と一緒に事務所へと向かう。
「楓ちゃん、桐谷君、お疲れ様です。お先失礼します」
「お疲れ様です」楓の声と共に悠基も軽く会釈をする。
悠基の人付き合いの下手さは、交流関係の広い楓でも克服する事ができない程だった。まだ二人が幼い頃から楓は何度か自分の友達と悠基を一緒に遊ばせてみたりしたのだが、悠基は黙ってそこにいるだけで遊びに参加することはせず、しまいには黙って傍を離れて行き部屋に閉じこもって本を読んでしまうのだ。これはさすがに、もうお手上げだった。楓も小さい頃から本が好きだったため、司書という職業に就いたが、この図書館を利用する人の中でも悠基ほど本を読んでいる人は見た事がない。きっと、彼にとっては人と話をするより本との対話をする方が幸せなのだと、楓はそっと見守る事にしたのだ。
それでも、楓は話しやすい人柄だからか両親よりも話やすいと悠基は感じていた。家の方向が一緒なため、帰り道に楓となんでもない話をすることが、唯一悠基が人に自分の事を話す時間だった。
「今月入ってもう何冊目なの？言ってもまあ、まだ五月の始まりだけど」
図書館からはお互いそう遠くないため、二人とも歩いて通っている。これは楓が提案したものだった。悠基がアルバイトとして働く以前は楓も自転車で通っていたが、悠基が入った今、帰り道で話す時間を楓なりに大切にしたいと思ったからである。
「十三冊目…かな」
「十三冊！学校もバイトもあるのに、よくそんな読む時間あるわね」
「…バイトだって週三くらいだし、時間はけっこうあるよ」
「でも、その中でも勉強だってしてるんでしょう？バイトって言っても手伝いみたいなものなんだから、たまには休んだっていいのよ？」楓は心配そうに悠基を見上げる。
「大丈夫。…好きでやってるから気にしないで」

楓の心配にも悠基はなんでもないように答えた。実際、毎日学校に通って勉強して、授業がはやく終わる日には図書館の手伝いに向かい、家に帰ったら少し勉強して寝るまでの間に本を読んで。そんな生活が悠基にとっての当たり前だった。

楓と別れ、家へと入った悠基は、ちょうど夕食の支度を終えた母にただいまと一言言うと、まっすぐに二階の自分の部屋へと向かった。今日借りた本を一回置くためだ。悠基は勉強机の上に本をそっと置くと、一階のリビングへと向かって行った。休日でも一日の半分は図書館の手伝いをし、残った時間は読書と勉強に費やす。他の人からしたら退屈な生活かもしれない。それでも悠基は今のこの生活に変化は求めず、ただ静かに一日を過ごして本を読んで過ごす事が最大の幸せで、これからもずっとそうしていきたいと願っていた。それは悠基自身、今の自分からの変化を恐れていたのかもしれない。

今日も、いつも通りの朝がきた。明け方まで本を読んでいたせいか、心なしか体が重い。しかし、悠基にとってそれはもはや「いつものこと」であった。睡眠より読書を優先する癖は幼い頃からのものであり、もう十数年間も悠基は睡眠不足と付き合ってきたわけである。人付き合いが苦手である悠基が一番長く連れ添ったものが睡眠不足とは、なんとも皮肉な話である。

外出も滅多にしない悠基はそれこそ色白で、全体的に細かった。運動は嫌いなわけじゃなく、高校までの体育の成績もなかなか良かったが、大学生になった今ではサークルにでも入らない限り、運動する機会など全くもってないのである。十九歳、という年頃になると程良く腕に筋肉がついていてもいいはずだが、生憎悠基の腕は女性なみの細さであった。

人付き合いが苦手で、外出も滅多にせず色白で細い。そんな悠基には今まで一度も彼女ができた事はない。年齢より若く見える両親のおかげか、悠基はなかなか整った顔を受け継いでいて、中学、高

校時代はそれなりに話しかけられたりはしたが、悠基がこのような性格だと知ると、悠基が断る前にみんな姿を消していったのだった。
大学では、悠基は司書の資格を取れる授業を副専攻で取っていた。月曜の授業は司書の授業と必修だけで、三限で終わる予定である。いつもだったら空いている放課後は図書館の手伝いに行くのだが、月曜日は休館日であるため、悠基は家に帰ったら昨日借りた本の残りを読んでしまおうとぼーっとした頭で考えていた。
変わりたいなど、一度も思った事はなかった。つい先日楓さんは婚約を決めて、婚約者を悠基にも紹介されたのだが、幸せに、とは思っても、うらやましいという感情は一切湧きあがってこなかった。元から、全て最初に諦めてしまう性格が悪いのかもしれない。本以外に、興味が持てないのだ。いくら言葉で気持ちを伝えようとしても、声にならない。声にならなければ相手にも伝わらない。それは悠基にとって分かりきったことで、内気な自分にはそんな事は無理だと、もう何年も前に諦めてしまった。
昨日借りた本は五冊ほど。今日の明け方までには三冊読んでしまったため、残り二冊のうちの一冊に手を伸ばし、ページを開く。この瞬間が大好きなのだ。本には今まで見たこともない、知らない世界が広がっていて、一瞬で引きこまれていく。本に埋もれながら死ぬのが一番幸せかもしれないと、悠基は誰もいない部屋で一人自嘲気味に笑った。

「やっほー、悠基くん」
次の日、悠基はいつものように学校が終わると、夕方に図書館の手伝いに来ていた。梯子に乗って、一番上の棚に本を戻しているところに、子供特有の高い声が静かに響いた。悠基が目線を下に下げると、悠基に声をかけた女の子はほほ笑みながら手を振っている。
「…こんにちは、実果ちゃん」本を戻し、梯子から降りる。
小学五年生の実果。この図書館の常連である。初めて二人が話し

たのも、実果から声をかけた時だった。当時はうまく受け答えができなかった悠基も、今ではそれなりにしゃべれるようにはなれた。なぜ実果は悠基に話かけたのかを前に一度聞いてみた事があるが、悠基が手伝いとしてここに頻繁に来るようになってから、かっこいいと思って話しかけてみたのだと言う。実果は、十一歳ならそれなりの好奇心が出てくる少しませた子供なのである。

「悠基くん、何かおもしろい本ない？もう伝記本飽きちゃって」

常連といっても実果がいつも借りていくのは偉人の伝記本などの明らかに小学生向けのものだった。それを知っていた悠基は少し考えて、実果と目線を合わせるように少し屈んだ。

「…ミステリーとかはどうかな」

「ミステリー？おもしろいの？」

「うん、おもしろいよ。推理系のもの、好きでしょう？」

「難しくない？わたし、恋愛小説とか読んでみたいんだけど」実果は悪戯っ子のように笑う。

「恋愛ものは、まだ早いんじゃないかな」

少し背伸びをしようとする実果がおもしろくて、悠基は小さく笑う。そんな様子を見て実果も「馬鹿にしないでよー！」と少し照れた。

たくさんの本が積まれたワゴンを引き、実果を悠基のお気に入り作家の作品がある棚へと連れていく。悠基は棚から一冊の本を抜き取り、実果へと渡した。

「…薄い本。すぐ読み終わっちゃいそう」

「文庫本だからね。まださすがに分厚いのは難しいかなって思って」

「…やっぱり、馬鹿にしてる？」本を受け取った実果が悠基を上目で睨む。

「…さあ、どうかな」

悠基ははぐらかすようにまた歩き始めると、実果は後ろをとことことついてきた。

悠基は実果の事を妹のように可愛がっていた。他の人からしたら

無愛想と言われる内気な性格の自分に、懐いてくれたのがとても嬉しかった。毎回悠基のところに来ては、一生懸命話しかけてくれる実果を見て、最初はうまくしゃべれなかった自分もなんとか実果としゃべりたいと自分なりに努力したのである。それは、たまには悠基自ら声を掛けたり、実果が読めるような本を探したり。その努力を大学の人たちに向けても出来ればいいが、諦めが早い悠基にはまだまだ難しい事だった。

家に帰ったらさっそく読んでみる！と借りた本をいつも持ってくる手提げに入れて帰った実果を見送ると、悠基は図書館の中にある時計を見た。時刻は五時を過ぎており、六時過ぎから軽い清掃を始めるため、悠基は心なしか急いでワゴンに積まれている残りの本を片づけていくことにした。

日本の作家の棚に本を戻していると、ふと目に入った本があった。一番上の段の右端。あ行の最初に並べられている作家の本。この作家はあまり売れる事がなく、既に作家を引退してしまっているが、悠基にとっては大好きな作家だった。退屈、おもしろくないなどの、ミステリー作家からしたら致命的な評価を受けた作家だったが、ただ単に表現が他の作家より難しいだけで、悠基は逆にそれがおもしろかった。

その作家の作品の中でも特にお気に入りだったのが「見えない月」という作品。ちょうど目の前にその作品があり、一番最後の貸出期限表を見てみると、十人ほどにしか借りられていなかった。

悠基の悪い癖が出てしまい、さわりだけでも少し読もうとページを捲ると、本の中に紙切れが挟まっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0246s/

影踏みライブラリ

2011年3月30日00時10分発行